W校中高等部だより
のみの市特集

平成二十六年（２０１４年）十一月十五日
ニューヨーク補習授業校W校

九月よりのみの市委員を中心に計画を立ててきましたのみの市が十一月十五日盛大に行われました。

中等部一・二・三年生・高等部による四つのグループに分かれてブースを出し、各学年とも幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々からなるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。

九月から始まったのみの市委員会では、まず最初に収益金の寄付先を決定しました。今回の寄付はルワンダの学校に援助を行っている団体に預けることに決定しました。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく会議を重ねてきました。意見が合わないこともあったり、思いが同じであったりといろいろなドラマがありました。

のみの市当日。保護者の方々による準備から始まり、一二時少し前にはすべての準備が整いました。幼児部のかわいいお友達が来場したところから会場内は緊張感が広がり、のみの市の雰囲気が高まりました。初等部の保護者の方々や生徒の皆さん、一般のお客様、卒業生など来場してくれ、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のために最高の笑顔を作り、とても一生懸命頑張っていました。

計画に大きなずれもなく、のみの市は無事終了し、保護者の助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に今回の集計結果が生徒会会長の立石君から発表され、収益金の合計は２８４５ドル３３セントでした。昨年を大きく上回る結果になり、大きな歓声が上がりました。生徒たちはこの達成感を忘れることはないでしょう。

のみの市当日、またのみの市開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様方には心から感謝申し上げます。

最後の『のみの市』

生徒会長　立石　恵利也

今年の「のみの市は」僕にとって、今までのものに比べて特別な「のみの市」となった。それは今年が僕にとって最後ののみの市だったからだ。中１の時から生徒会行事として参加し始め、ずっとやってきたこの「のみの市」も最後となり、この５年間が早く過ぎたなと今感じる。今年ののみの市は僕が生徒会長としてリードしたのみの市だったが、企画や細かいことも高等部のみんなや、のみの市委員会で話し合えたのでよかったと思った。

毎年のみの市は集めたお金を寄付するが、今年は僕が春まで在籍した学校の団体に寄付することになった。その団体はProject Blessingといい、ルワンダにある村に学校を作ったり、井戸を作ったりしている。意義ある団体に寄付ができ、本当によかったと思う。

高等部は例年通りクレープを作ることにしていて、前の日に高一の中田君の家に集合した。僕はアメフトの試合があったため遅く行ったが、みんなと話し合ったり遊んだりできて高等部の仲間がさらに近くなった気がした。クレープはみんなの協力でうまくでき、当日のクレープもベークや雑貨もよく売れて、高等部は９００ドルほど売り上げがあった。全体的にのみの市はうまくいき、２８００ドルほどの収益をあげることができた。W校中高のみの市はお金を集めるだけではなく、クラスのみんなが協力して取り組むことで親密になれる機会でもあり、みな楽しい時をすごせたと思う。今年ののみの市は大成功だったと思う。

大人になった僕たち

中等部一年　加藤　和樹

外で思いっきり遊んで汗をかく暑い夏が過ぎ去り、家の中でひきこもりになってしまう寒い冬がやってきました。そんな何をするにもやる気も出ないような気温でも、今日の「のみの市」では、精一杯がんばろうと思いました。そのような心がけ、意気ごみで「のみの市」にとりくんだのは僕のみならず、いつもは見られない、友達たちの大人になった姿を見ることができました。



ハチの巣をつっついたかのように、小さい手に大きなお財布を持った幼児部さんたちが大勢でやってきました。周りを見渡すと、その大さわぎの幼児部さんたちに対して、一生懸命やさしく対応しようとするクラスのみんなの大人の姿が現れていました。お金の関係をあまりわかっていない幼児部さんの横にしゃがみ、わかりやすく説明しようとしている人の姿。いつもはふざけてまともに授業を参加していない人が、汗をかきながらかき氷をけずる姿。いつもは静かであまりしゃべらない人が、大声で店の宣伝をしている姿。こんなしっかりしているクラスのみんなを見て、自分もがんばらなきゃと思いました。また、幼児部さんたちが帰り、保護者の人たちがやって来ると、みんな礼儀正しく対応しており、こんなに寒い日でも、かき氷を買ってくれました。

「のみの市」において僕は、クラスのみんなの大人になった面を見ることができ、もっとみんなのことを知ることができました。来年の「のみの市」では、なんだかんだとみんなについていくのではなく、今学級委員である僕は、もっとみんなを引っぱり、今年の「のみの市」に負けないほどがんばりたいと思います。

最高＆初めてののみの市

中等部一年　小川　花

私は最初「のみの市」の事を聞いた時、心の中は不安と期待があふれました。うまくいくかなあ、という不安な気持ちとクラスみんなの心を一つにするチャンス！という気持ちでした。当日が近づくと、その二つの気持ちがぶつかりだし、最後は自分の気持ちの整理と準備ができないまま、のみの市をむかえてしまいました。

最初に幼稚園生が来ました。私は誰にも声をかけられず、最初の五分間はずっと周りを観察していました。幼稚園児はだいたい同じ所にかたまっている事に気づきました。そして、自分より背が高い人、つまり中学生が同じ場所に集まると、幼稚園生は近づけない事に気づきました。私はそこで「こんなんじゃダメだ。最高の思い出を作ろう。」と思いました。そして一人一人に少しずつ声をかけました。幼稚園生が帰ってしまうと私は思いました。「今日は百二十パーセントを出そう。」



今回、行ったベークセール、ゲーム、カキ氷、雑貨セールの中で私が一番楽しかったのはベークセールです。なぜかというと、ベークセールで私の班の人達の心が一つになったと思うからです。私達のベークセールをする場所はドアから遠く、あまり人が来ません。そこでは全員の力で人を呼ぶしかありません。友達に声をかけ、みんなで声を合わせました。「いらっしゃいませー！」少し恥ずかしかったですが、班で一緒に声を合わせたその時、心を一つにする事とは、こうゆう事なんだなあと思いました。

中二になったら、のみの市で試したい事があります。それは一、なるべく小さい子に声をかける事。二、笑顔を忘れない事。そして三、楽しむ事です。小さい子はおおぜいで行動する事が多いのです。なので、一人に声をかけたら、きっとドンドン来るはずです。声だけかけてもダメなのです。声をかけると同時にさわやかな笑顔を見せたら、いいと思いました。最後は楽しむ事。私は良く言われました。「楽しまないで、どうする？」思い出をいっぱい作り、十年後に、「ああ、中一ののみの市は楽しかったなー。」と思いました。

のみの市の感想

中等部一年　保山　健人

今日、僕は補習校ののみの市を行いました。

最初に幼児部が来ました。全員ちょっと小銭を持って、色々な物を買って行きました。中一ではゲームとして、ボールをコップの下に置いて三つのコップを混ぜ回して、最終的にどのコップの下か当ててお菓子をもらうゲームと、じゃんけん大会を出しました。じゃんけんの方はあまり上手く行きませんでしたが、もう一つのゲームは大ヒットでした。僕は、幼稚園生がほぼ全員ボールがどこにあるか当てられたのがびっくりでした。幼児部が帰ったら、六年生達が次に来ました。しかし、六年生の時はあまりお金がたまりませんでした。

中には「わー、小さい子供にお菓子のためにお金を払わせてるー、詐欺だー。」などを言ってる人もいました。六年生が帰ったら、一般公開が始まり、かき氷などを売り出しました。

僕のグループは最初に休みだったので、僕は昼食を食べてから色々な他の学年の出し物を食べに回る事にしました。かき氷の他に、フルーツゼリーソーダやきな粉餅、クレープも食べました。全部、皆の、のみの市への熱心な心がつまっている様な美味しい味がしました。僕の最初の仕事はかき氷の会計役でした。何回かお釣りをちょっと間違えて何家族かに時間がかかりましたが、たくさん人が来て大ヒットしました。そのシフトが終わったら、ベークに行きましたが、売り切れていたので集まった金額の計算をして、またかき氷にもどり、また会計役をしました。それからもうちょっと働いて、のみの市は終わりました。のみの市はすごく楽しかったです。

初めての「のみの市」

中等部二年　山田　桃子

私は日本語補習校に来て初めて「のみの市」を体験しました。私の頭と心の中はただ「とても頑張った良い思い出」ということです。私の中で特に思い出に残ったことは二つあります。

一つ目は、子供たちだけで一から作業を進めてきて、改めて「仕事の大変さ」を実感したことです。私は日本に住んでいる頃もこのような体験をしたことがあります。その時は、大人の方々にもお手伝いをしてもらいながら作業をしました。なので、今回このような楽しくて成長ができるような行事を体験させてもらえてとてもうれしかったです。

二つ目は友情が深まったということです。普段の補習校の風景はほとんど勉強だけなので、あまり個人での会話ができないけれど、今回このような体験をさせてもらったことによりみんなとの距離が縮まったように感じました。そして、一緒に日本語補習校で過ごすことができる最後のクラスメイトともたくさんのお話や活動ができてとても良い思い出になりました。

これからもこのような活動や企画がある度にさらに友情が深まればいいなと思います。勿論、普段の授業でもなんらかの交流ができればいいなと思います。

本当に最初はみんなとうまくやっていけるか心配だったけど、このようにとても良い思い出になり、寄付先への資金もたくさん集まったので大成功だと思いました。

「蚤の市の日」

中等部２年　細野露可

今日、学校で、待ちに待った「蚤の市」の行事がありました。僕たちはこの日の計画を何週間も前から立てていたので、いよいよその計画を実行する日が来たのです。僕たちのクラスでは、サッカーゲームと４種類の団子（しょうゆ、みたらし、小倉、わらび餅）とお茶の販売で大繁盛でした。団子の係は、朝早く起きて、もち粉とお豆腐で直径２センチの団子を作るので、一番大変でした。それでも、今年の寄付の行き先の「ルワンダの学校の生徒たちの為だ。」と思って、歯を

食いしばって、丸めにくい団子を手で丸めて茹でて、氷で冷やして、作り続けました。母も朝２時半に起きて、団子作りを手伝ってくれました。母は、ベークセールのミニ弁当５個と、僕のお弁当も同時進行でした。結局、僕は、団子を１１７個も作って、持って行きました。



蚤の市の朝は、第２カフェテリアが、保護者の作ったベークセールの食べ物の商品と、各家庭から集めたおもちゃや本や洋服やバッグなどなど商品を、母たちのボランティアの保護者が並べて、りっぱな蚤の市会場が出来上がっていました。家庭から持ってきた団子を、カップに３個づつ入れて、あんこと、しょうゆ味、みたらし味を上からかけて、そしてわらび餅も入れて、テーブルの上に並べる販売の準備ができた頃、会場に幼児部の子たちが現れました。小さくて、可愛い児童たちです。

僕は、自分が幼児部の時に、のみの市に買いに来たことを思い出し、精一杯幼児部の子たちに優しくしようと思いました。「僕もこんなに小さかったんだ。」しゃがんで子供たちに、自分から「何が欲しいのかな。」「どれがみたい？」などと、話しかけました。彼らは、雑貨を買う時に、ビニールの袋から、小さな手で２５セント玉を取り出し、払うときに僕たちにそっと差し出しました。僕が雑貨を売っていた時には、幼児部には「バクガン」が人気で、すぐになくなりました。六年生が来たときには、僕はまだ雑貨担当でしたが、あんまり人が来ませんでした。一般の人が入った時、団子を売り始めたら、人がどんどんカウンターの前に現れて来て、雑貨を買う人が沢山来ました。中では沢山買う人もいて、それで中にも「こんなに買ったお父さんに怒られる。」と、言って、おそるおそる買っていた子もいました。

やがて僕が団子の係になったとき、終了の時間が迫ってきたので、値段を下げて、売ることにしました。僕の休憩時間では、他の学年のお店を見学に行きました。みんなユニークな食べ物を売っていました。　昨年の中一で売ったかき氷や、中３のフルーツポンチ、高等部のクレープもありました。

そして、蚤の市が終わって、生徒会長から、報告会があり、僕たちが、学年で８２２ドル売ることができ、中等部でトップになって、「わあーっ。」と、声をあげました。嬉しくてたまりませんでした。中高等部全学年で、計２０００ドル以上寄付することができました。

一緒に企画してくださった先生方や、生徒会の皆さん、そして、団子をクラス分の試作をして、ベークセールのための「から揚げとだし巻卵とおにぎり」のミニ弁当を作ってくれて、朝から団子作りの手伝いをして、当日も朝からボランティアの手伝いをしてくれた母にも、心から感謝したいと思いました。今年の蚤の市は大成功に幕を閉じました。ルワンダの子供たちに、僕たちの思いが届くといいなと思います。

去年と今年の蚤の市

中等部２年　福島　大朗

僕は今回の蚤の市まで、このイベントでの良い思いでがありませんでした。特に去年、１年２組の蚤の市の後は、商売の難しさを知りました。去年の僕たちのクラスは最低の売り上げだったため、残念な結果になってしまい、良い思いでがあまりできませんでした。しかも僕たちがどのクラスより時間を掛け、最大のお金を使ってい、最も張り切っていたからです。それでも当日、僕たちではなく、目の前にいたもう一つの１年生たちの所に、行列が出来ていました。僕たちの所には悲しいほど客がよって来ず、僕は途中からは、他のクラスの出し物、雑貨、食べ物などを、見回っていました。しかし、どんなにテンションが低くても、僕のクラスメートたちは、諦めずに仕事を続けていました。と、言っても最終的には目の前にいた１組たちが成功するのを指をくわえて見ているだけでした。結果として、２組は合計３―４百ドルほどしか稼げませんでした。でも、あの去年の結末があったからこそ、今年の成功が成り立ったのかもしれません。

今年の計画を立てている時、去年の結末があったせいで、僕は何度も頭の中で繰り返していました。「去年みたいじゃ嫌だ、」と、そのせいで、何でも余計ネガティブに考える様になり始めました。正直に言うと、今年の中２のゲームや食べ物のアイディアには、反対していました。特に食べ物のだんごには猛反対でした。合計の量と言い、一つの皿の見た目と言い、成功するとは思っていませんでした。クラスが決めた結論は全て、悪い方向に導いているとしか思えませんでした。家ではストレスを発散するために、母と会話を毎日の様に話していました。良いことに、母はなぜか蚤の市のことだけは以上に興味を持っていました。よくクラスが何をしたほうが良いのかなどを教えてくれていました。その方が、僕もすっきりしていました。

「本当は子供たちのイベントなのに、大人が口鋏んじゃいけない」と母は毎回言っていました。それでも、いつもこのことを話し、僕がクラスに母のアイディアを届けて、新しく決まったアイディアを僕の陰でいた母に届けていました。しかし僕には難関がありました。僕は野球をやっているため、土日に野球が重なることが多数ありました。なので、週に一度しかないクラスの蚤の市の会議にも出席できていませんでした。なので、母の考えは言えず、ただ結論を伝えることしかできませんでした。結局、考えをほとんど言えないまま、もう足手まといと言ってもいい所まで来てしまいました。



蚤の市当日、僕は悪い気がしてやる気がそんなにありませんでした。明らかに僕のやる気の無さははんぱ見たいでした。なぜなら終わった後に、母が他のお母様たちに、僕がテンション低そうだったとたくさん言われたからです。準備中もまた去年のことを思い浮かべてしまいました。そのせいでますます怖くなっていました。しかし、現実では予想とはるかに違う結果でした。食べ物のだんごは思いのほか人気らしく、

それだけで去年の合計を越えていました。結果として８２２ドルの売り上げでした。この計画を反対して、僕は謝罪しています。これをきっかけにクラスをもっと信じていきたいです。

残念なことに僕のクラスから十一月で辞める人たちが５人います。一人一人、このクラスにとって、大事な存在でした。毎週、この不思議なクラスを賑やかにしてくれていました。一人は中一から来たにも関わらず、クラスでの中心になった人、いつでもポジティブで、明るい空気にしてくれた人、何でもパーフェクト、みんなの憧れだった天才、日本語が流暢でなくてもずっと補習校で頑張った人と、人生が掛かっている様にいつも蚤の市でリーダーとして何でもやってくれた人。この人たちが最後の蚤の市で大成功で終われてやかったと思います。来年はこの人たちぬきでどこまでやれるのかが楽しみです。



二〇一四年ののみの市

中等部三年　阿部　紘子

のみの市と言ったら私はクラスの出し物を連想します。今年はクレープ、団子、かき氷にフルーツポンチが出ました。私のクラスはフルーツポンチです。

このフルーツポンチは私が提案したものです。いろんな味のゼリーをキューブ状に切って、フルーツ缶とミストというソーダをそれに足しました。私のクラスは人数が少ないので、集めたお金が少なく、予算内に材料を集めるのが大変でした。

先生を含めたクラスの人、十二人から一人十ドルを集め、百二十ドルを資金としました。そこから、インターネットで安いフルーツ缶やソーダを探して、送料をかけないために店に買いに行きました。そのおかげで、百六オンスのフルーツ缶を七ドル位で買えました。ミストというソーダは二リットルを二ドル位で買えました。ゼリーは一箱二ドル以下、十二箱を二十四ドル位で買えました。食材は合計で五十ドル位におさめられました。ナプキンやスプーン、カップなどはクラスメイトが買ってきてくれました。うれしい誤算は、ハウエル先生がトングやフルーツを入れるボウルを安く買ってきてくれたことです。こうして、クラスの出し物に必要な物は合計八十七ドル八十一セントでそろえられました。元々資金は百二十ドルもあったので、お金がたくさん余りました。そこで、クラスの人達全員にフルーツポンチを買えました。残金の八ドル十九セントは寄付しました。

「のみの市の感想」

中等部三年　小野元暉

十一月十五日、ＮＹ補習授業校で「のみの市」が行われた。これは、例年の行事であり、集めたお金は寄付することになっている。今年度の寄付先は、ルワンダの貧しい学校だった。このように、のみの市で不幸な人々に寄付金と言う形で援助

することは、苦しんでいる人を助け、同時に我々生徒たちが大きなイベントを企画する良いチャンスであり、すばらしいと思う。

中三のクラスの出し物はフルーツゼリージュース（正式名称は不明である）で、これはフルーツ缶とゼリーとレモンソーダを混ぜた飲み物か食べ物か分からない食品であった。しかし、客に人気であったことから、味は良かったと言えるだろう。その人気度を表すクラスの食べ物へ続く行列は、多いときは十人以上に感じ、そこでのシフトの人たちは忙しく働いていた。中三の出し物は、一番先に完売し、大ヒットだった。昨年は、タピオカバブルティーを売り、それもヒットだった事から、どうやらのみの市では、飲み物系が良く売れるようだ。



クラスの親たちが作ってきてくれたベーク品もとても良く売れ、そこでのシフトになった時はもう売るものがなかった。

しかし、雑貨と幼児部の遊びはあまり人気がなかったようだった。幼児部の遊びはネズミのおもちゃをラジコンで操作し、それでレースをするものであった。だが、その操作が難しく、子供たちはあまりできていないようだった。クラスの何人かが上手く人を引きつけてくれたので、幸いにも遊んでくれる人は多かったが、やはりあまり面白くないと思われたようだ。

また、雑貨は、目玉商品がなかった事から人気がなかった。小さいおもちゃは、子供たちに買われていったが、一番あてにしていた漫画がなかなか売れず困った。その他の商品は、見ていてもあまりパッとせず、少しずつしか売れなかった。徐々に品物はなくなっていったが、最終的にかなり残ってしまった気がした。

今年の「のみの市」は、成功と失敗の組み合わせだったが、とても面白く、良い思い出となった。これからも、生徒たちが企画するイベントがあればすばらしいと思う。

のみの市２０１４を終えて

高等部一年　グレイ希望

私にとって、今年は高校生として始めてののみの市だった。のみの市は高一と高二が団結し、中等部の各学年も精一杯頑張ったおかげで無事成功し、とても楽しい思い出になった。

今年は中学生だった頃ののみの市とは少し違う体験ができたと思う。のみの市のミーティングでは何度か大丈夫かなと心配したけれど、すべては順調に進み、中等部の各クラスは責任を持って取り組んだのでそんな心配はいらなかった。のみの市の前日、それぞれの現地校が終わった後高等部はクレープを作るため一人の家に集まった。その家で泊まって次の日一緒に登校して準備するのはとても楽しかった。楽しみながら作ったクレープや用意した材料はとてもおいしそうにできあがった。学校の外で一緒にのみの市のための準備ができ、テーマの「友情」がよりよく達成されたと感じた。

幼児部の子供達をのみの市に招待するのも面白かった。元

気な子供達を見ていると、私達もそうして高校生のお兄さんやお姉さんを見上げていた頃があったんだなと気付いた。それに、その小さな子供達の中でもいつかのみの市で頑張る子供がいるんだなと思うとなんだかすごく嬉しく感じた。最後のほうにランチの時間があった私は保護者の方が作ったお弁当と他のクラスの食べ物や私達のクレープを食べて中等部の人にも話しかけた。いつもは長く感じていたのみの市はなぜかあっという間に終わった気がした。売り上げの結果もとても良くて皆の努力の表れだと思った。皆と頑張ったことでお客さんに笑顔を浮かばせ、売り上げをルワンダの学校に寄付して子供達を助けることができてものすごい達成感を感じた。

信じられないくらいだけれど、私は来年高校二年生になってのみの市や補習校の色々な行事に参加できるのが最後になってしまう。だからこそ来年も今年と同じように高一と団結して皆とのみの市と言う中高等部の大イベントをまた成功させたい。



高等部一年　前田花帆

のみの市

高一と高二。以前は二つのクラスであったこの二学年は、今では、高等部と名付けるのが正しいと私は信じている。今までは、先輩と後輩として、どういう関係が正しく、どう統合すればいいのかがはっきりせず、微妙な距離感が感じられた。うるさくて人数が多い私たち高一とわずか四人の高二。普通はバランスが取りにくいと思われる。けれど、一人一人の性格と個性のおかげで、私たちは一つになれた。

この機会を私たちにくれたのがのみの市であった。今では、高等部の伝統なようなものになっている、のみの市の前の晩のスリープオーバー。今年も、私たちはここ何年かの高等部がやってきたように、全員で中田君の家に泊まり、のみの市の用意を一緒にした。クレープの生地を１６５枚焼くのにはいったいどれぐらい長い時間がかかるのだろうと思いながら私たちは作業を始めた。どのグループが一番多く焼けるかを競争したり、クレープ作りが下手な人をからかったりしていたら、あっという間に仕事が終わっていた。中田家のキッチンはみんなの笑い声とクレープの匂いであふれていた。やるべき仕事が終わって、ほっとして寝た人もいたし、私のように、一分も寝なかった人もいた。クラスメートの寝顔の写真を撮りながら、声を出さずに笑おうとしていた人も一分も寝てないとは思えないぐらいの笑顔。　映画を次々と見たり、異常に寒いのに朝日を見に歩いて行ったり、金曜日の夜から補習校に登校するまでの時間は楽しい事ばっかりだった。

一緒に二十四時間近く過ごし、ほとんど眠らず、高等部の１３人でのみの市に行った。私たちが一晩の泊まりでどんなに仲良しになったかを見て、これからの高等部としての活動が楽しみだ。高一と高二、別々の学年ではなく、一つのクラス。高等部！

高校生としてののみの市

高等部一年　清水　孝朗

今年ののみの市は、過去3年とは違う経験だった。初めて、高校生として、僕たちの学年だけではなく、ひとつ上の高校二年生と一緒のグループで高校生として一緒に活動した。今までも、ホームルームで一緒だったけれど、特別に何かのつながりを感じたことがなかったが、今回ののみの市を通して、強いつながりを感じられるようになった。ひとつ上の学年の先輩とも、今では自分の学年の友達と話すように、仲良く何でも話せる友達となれた気がする。これは、やはり、のみの市の前夜のスリープオーバーがあったからだろう。

前の夜は、全員で、協力し合って、一生懸命に頑張った。最初は、あまり上手にクレープが焼けずに失敗ばかりだったけど、そんな失敗も楽しくて、皆で大笑いしながら、頑張って焼いた。みんなで、協力し合い、二時間以上クレープを焼き続けた。クレープを焼くのは、慣れてくると、単純で同じ作業の繰り返しではあったけど、ちっとも飽きなかった。それは、クレープを焼くことに集中していたからではなく、その経験に楽しみを感じていたからだと思う。僕は、クレープを焼きながら、回りを見て、自分が今までとは違う新しいグループの中にいることを感じた。今までは、名前と顔しか知らなかった高二の先輩たちと初めて、一緒になれた。先輩、後輩、学年を離れて、初めてひとつとなれたと思う。誰も、他の誰よりも、年上でもないし、利口でもないし、偉いわけではない。全員がイコールで、みんなが友達で、ひとつのこと、クレープを焼き上げることだけに集中していた。



一つになれたという気持ちは、当日ののみの市でも続いた。僕たちは一つのユニットとして、力を合わせ、頑張れた。僕は、寝不足でフラフラだったけど、大声を出して、クレープ売りを呼びかけた。クレープが僕たちを一つにまとめてくれたのだと思う。

僕は今、今週の土曜日、また、皆に会うのが楽しみだ。クレープのつながりがきっとまだ残っているはずだと思う。

最後ののみの市の感想

高等部二年　アギスキー実奈

高2に入ってから最初に気づいたことは今年が最後ののみの市ということでした。五年間のみの市に参加して学んだことはいっぱいあります。グループでの協力のしかた、役割のしかた、意見の言い合い―将来世の中で使う必要のある能力を得られました。でも、一番学べたのはこの二年間だと思います。高等部はクラスの人数が減りお互いを知り合うことのできる時期だと思います。今度は自分のクラスだけではなく違う学年の人とも毎週交流することになります。なのでのみの市の準備も2つの学年で協力してする必要があります。

去年私は先輩達を見習い次の年にくる後輩のためにしっかりしようと思っていましたが、みんなしっかりと準備や用意

などができていてびっくりしました。クレープもせっせとできて去年よりずっと短い時間で１５０枚焼けました。焼いた後はみんなとゆっくりできて楽しい時間が過ごせました。多くの人は楽しすぎて睡眠をとりませんでしたね。

のみの市当日は大成功だったと思います。少しバナナを忘れたかなどちょっとしたハプニングもありましたが結果はよかったです。風邪っぽくて雑貨の当番しかできなかったけれど私が見られた限りみんなよく協力できていて少し満足した親のような気分でした。今年ののみの市は悪い思い出なくできてよかったと思います。来年はお客さんとして様子を見に来ようかなと思います。楽しみにしていますから来年もがんばってください。

のみの市

高等部二年　ハナガンありそん

参加できる最後の蚤の市が終わってしまった今、思い返してみて、私はとても満足している。結果、つまり寄付金の多さというよりも、むしろこの行事を通して得られた経験の多くに対する気持ちの方が大きい。元々蚤の市は私の好きな行事の一つだが、今年は私にとってより特別なものだった。

私は最近まで知らなかったのだが、高校生達は蚤の市の前日、誰かの家に泊まり込みでクレープを焼く、ということが当たり前になっていたのだ。だから私たちも先輩たちに習ってお泊まりをすることにした。表向きは蚤の市のためだが、実際はただ皆で遊びたいだけであって、それに協力してくれた人たちには感謝していると共に少し申し訳なく思っている。だが、そういう人たちのおかげで私たちはとても楽しい時間を過ごすことができた。以前からしゃべりたかった人と会話できたり、補習校でしか会わない皆と映画を見たりと、とても楽しい時間を過ごした。皆いつもよりも打ち解けているようで、会話もはずんだ。

次の日、といってもほとんど皆夜更かししたのだが、補習校へいった後もその雰囲気は変わらなかった。私にはそれがとても嬉しかった。以前まではいつも緊張して皆とあまりしゃべれなかったが、そういう固い雰囲気がお泊まりを通してなくなったように感じたからだ。

蚤の市ではクレープを完売できたし、売り上げも上々だった。そこでの時間はとても早く感じられて、解散になるまであっという間だった。皆とワイワイ過ごし、ほとんど睡眠なしで補習校に向かい、蚤の市を行った。だがそれも終わり、家に帰ると私は一瞬で眠ってしまった。眠りは深く、長い時間ではなかったが、あれほど気持ちよく眠れたのはとても久しぶりだった。



今年のお泊まりと蚤の市は、過ぎてしまったことが少し悲しい。なんだか卒業式に感じる悲しさと似ていて、もうすぐ補習校を卒業してしまうことを思い出してしまった。しかし残りの補習校での日々は、以前よりも皆と仲良く過ごしていけそうで、楽しみだ。